

ほっと・ルーム（学校臨床総合教育研究センター分室）での 臨床支援活動の6年間

報告者 センター教授 亀口憲治

ほっと・ルームでの臨床支援活動は、筆者の私が平成10年4月に教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センターに赴任した直後にさかのぼる。当時のセンター長であった近藤邦夫教授や助手の堀田香織さん（現在は埼玉大学助教授）とともに、附属学校長であった小川教授や高橋教諭をはじめとする附属学校の方々と相談しつつ、校舎の一角に新たな相談室を設置する準備を進めた。

「ほっと・ルーム」という名称を、全校の生徒・教師の皆さんから寄せられた候補の中から決定した日のことが懐かしく思い出される。その後、この名称は、全国各地の学校のカウンセリング・ルームでも採用され、群馬県では県内の多くの相談室やカウンセリング・ルームの愛称として親しまれているようだ。

それからすでに6年近くの年月がたち、附属学校では実に様々な変化が生じた。そして、ほっと・ルームに関係した多くの人々が、附属学校を去っていかれた。ほっと・ルームの産みの親ともいべき近藤教授は、体調を崩されたためにセンター長の任期を1年残して辞任され、2年前に東大を退官された。また、常にその活動の中心を担ってきた歴代の3人の助手の人たち（堀田、大矢、長谷川の各氏）は、これは喜ぶべきことではあるが、次々に就職先が決まり、転任されていかれた。

附属学校の側でも、この間に小川、浦野、三浦の3代の校長の交代があり、平成16年4月からは汐見教授が校長に就任することが決定したばかりである。副校長として、やはり相談室の開設にきめ細かな配慮をされた蛭田、小島の両氏も数年前に退職された。附属学校からセンターへ派遣される協力研究員も、初代の高橋均教諭に始まって平野、橋本、鈴木の各氏にリレーされてきた。

さらに、東大教育学研究科の臨床心理専攻の数名の院生・研究生が、ほっと・ルームを拠点とするさまざまな臨床支援活動に積極的に加わった。そのメンバーは、市橋、高橋（亜）、高岡、佐伯、角田（現在のセンター助手）、瀬戸、木村、金子らの諸君である。とりわけ、市橋、高岡、角田、瀬戸の4名の院生は、平成12年度から始めた予防カウンセリングの一環としての「臨床心理学入門」の授業づくりにおいて、附属の高橋教諭とともにきわめて大きな貢献を果たした。彼らは、心理教育プロ

グラムのカリキュラムを白紙の状態から開発するという難題に、積極的に取り組んだ。開発チームのリーダーである私が手当たり次第に繰り出す要求や指示に、彼らは見事に応えてくれた。いや、期待以上の成果を上げてくれたと言うべきかもしれない。毎回の授業後に実施している生徒による授業評価が年を追うごとに上昇し、最近では90点に近い評価を得ることもある。附属学校独自の「心の授業」が、生徒の期待に応えつつあることを明確に示しているのではないだろうか。

その成果は、教育学研究科の紀要論文やセンター年報の報告書として毎年公刊してきた。また、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドで開催された学会や大学での講演会等でも発表を行った。そのうちの数編は、センターの外国人客員教授として2年間にわたって在籍し、プログラム開発に多くの貴重な示唆を与えたジョージア大学のヘイズ教授との共著（英文）としてまとめられ、招待論文として教育心理学年報等に掲載された。プログラム開発の過程で考案された、家族イメージ法（FIT）、家族粘土法などの臨床支援の技法も、心理臨床学会、家族心理学会、米国心理学会等の専門学会や研究会、講習会、研修会を通じて海外も含め広く紹介され、大きな反響を集めつつある。中国政府派遣研究員の徐教授によって翻訳された中国語版も現在印刷中であり、近日中に上海をはじめとする中国の主要都市の学校心理士や臨床心理士を対象とする研修会で紹介される予定となっている。

平成16年4月からの法人化とともに、教育学研究科に臨床心理学コースが新設される運びとなり、私はその専任として移籍することになっている。センターの機構改革によって、センター分室としての「ほっと・ルーム」は、いったんその幕を閉じることになる。しかし、これまで担ってきた臨床支援活動は新センターによって引き継がれることになっている。また、私自身も臨床心理学コースの責任者として、角田助手や院生の諸君とともに附属での臨床支援活動を継続していきたいと念願している。

東京大学の法人化に伴う措置として附属学校に「安全衛生管理室」が設置され、校長がその統括責任を負うこ

ととなった。おそらく、これまで「ほっと・ルーム」が担ってきた臨床支援活動は、この管理室と密接に連携して展開することが求められるようになるだろう。われわれのチームが推進してきた予防カウンセリングの考え方が、これまで以上に必要とされるようになるはずである。生徒・教職員の安全と衛生を良好に保つために必要とさ

れる「先端的な知」が、つぎつぎに生み出されるものと予想される。1951年の誕生以来、本校は戦後日本の教育史のなかでもきわめてユニークな位置づけを与えられてきた。今後は、生徒と教職員の安全と衛生に関わる積極的な実践活動が展開する「学校」として、広く社会に貢献できるようになることを念願している。